

在外研究報告

私のアメリカ留学見聞考

池 田 魯 参

はじめに

私は、平成4年(1992)4月1日から平成6年(1994)3月31日までの2年間、駒澤大学在外研究員として、アメリカ合衆国ヴァージニア州シャーロッソウル市にある(charlottesville. V. A U.S.A 22903) ヴァージニア大学の宗教学部(Depertment of Religious Studies, University of Virginia. UVAと略称)に留学し、仏教研究に従事した。第1年目の研究課題は、「U.S.Aにおける東アジア仏教の研究動向についての実態調査」であり、第2年目は、「日本中古天台本覚法門に関する共同研究」(共同研究者 Paul S. Groner)であった。

UVAには、日本天台の研究者であり、『最澄』("SAICHŌ-The Establishment of the Japanese Tendai School." Berkeley Buddhist Studies Series 1984) の著者として高名なポール・グローナー教授(Paul, S. Groner)がおられる。私が参照したい研究図書はすべてグローナー氏の書斎にそろっており、私は体一つ運べばすむという願ってもない研究環境にめぐまれたのであった。

また、私の留学先の選定に当って、私が敬愛する友人である、吉津宜英教授の助言を頂いたのであるが、吉津氏が7年前に(私の渡米決定の時点で)は、同様に駒澤大学の在外研究員として1年間、UVAで研究され¹⁾て以来の気のおけない仲ということで、グローナー氏がおられるUVAを熱心にお勧め頂いた御縁によるところも大きい。

さらに幸運なことに、学部教授会で私の在外研究が承認された、その年の秋、ちょうど東京大学の末木文美士教授がUVAに4ヶ月間留学しておられ、渡米にあたって準備しなければならない種々のことを助言して頂いた。末木氏の紹介でお近づき頂いた都立大学法学部の浅倉むつ子教授からは子供のことやら、住居のことなど、細々とした身の回りの御心配を頂いたのである。私の渡米に入れ交わり御帰国になられた日本大学(山形)工学部の菅又信教授の御家族が住んでおら

れたアパート (Ivy Gerden) の一室をそっくり、家具や調度品の一切を含めて譲って頂くというような交渉までしていただいた。折角のこのアパートも、下の階の部屋にいた子持ちの住人が深夜まで騒がしく、私たちの睡眠さえ妨げられるほどであったので、とうとう6月までの3ヶ月間を過しただけで終り、グローナー氏のお世話で一軒屋を借りることにして、すぐに引越すことになってしまったのである。顧みれば、渡米早々、右も左もわからぬ異邦人が、落ち着き先の心配もせずに、家族と一緒に安心して日本からアメリカに移住することができたのは、一重にこれらの諸先生方のお蔭であったと、しみじみ想うことである。

末木氏には、2年目の11月にAARの学会に出席するために渡米された折、お会いし、シャーロットヴィルにも立ち寄られたので、同行された山形大学の松尾剛次氏と、グローナー氏と一緒に私の家において頂いて、夕食を共にしながら夜更まで歓談することができた。忘れ得ぬ楽しい夜の一齣となった。

また、浅倉氏には、渡米した直後から、教授が1年間の留学を終えて8月に帰国されるまでの5ヶ月ほどの間、家族全員でそれこそ筆舌に尽くせぬほどお世話になり、種々御心配を頂いたことであった。家族共々、心から感謝申し上げる次第である。浅倉氏の物静かな立居振舞いには英國仕込みかと思わせられるところがあったが、氏は男女雇用機会均等法に関する研究の権威で、山川菊江賞も受賞された気鋭の学者である。氏の益々の御活躍を心から期待している。

シャーロットヴィル界隈

私が2年間住んだシャーロットヴィルは、UVAを中心にして出来た学園都市である。街全体がしっとりした落ち着きがあり、普通の街の喧噪さからはほど遠い。大抵の市民は大学になんらかの関係があり、学生でなければ、これらの人々を対象とした、サービス機関に勤めている人か、商売をしている人たちである。

グローナー氏の話だと、アメリカ人が退職した後、余生を送るために住んでみたい所として選ぶいい土地のなかに、必ずシャーロットヴィルが数え上げられるとのことであった。その理由は、緑が多く静かで人情がいいこと、大学の医学部が充実していて病気になったらすぐいい医者にかかることが、大学で種々の催し物があって教養や知的な刺激が満たされ、たいくつすることがないことだという。この意見には私も同感である。

上り下りの坂が多い丘陵地の地形を生かして、赤レンガと白壁の美しく調和し

た大学の建造物が街全体に配置されているような感があり、これらの建築群が濃い木立の中に包まれている。構内の、手入れがいきとどいた芝生の庭は誰れでも入れるようになっており、休日ともなれば子供連れの市民がのどかに集い、日がな学園の雰囲気を楽しんでいる光景はなんともいい。

ヴァージニア州の州花は花水木、州鳥はカージナルであり、車のナンバー・プレイトにまで形どられている。私が住んでいた家の庭の周囲にも早春に花水木が咲き乱れ、朝夕につがいのカージナルが飛来してしきりにさえずっていた。裏庭のデッキには毎朝、決まったように数匹のリスが群れ、雪の朝も餌をねだりに来たし、野うさぎまでが木立ちの下を徘徊し、その間にはけたたましい声を上げるブルー・ジェイズ外の名も知れぬめずらしい鳥たちが群れ飛んでいた。

また、市街地から車で30分も西に出ると、アメリカ東部を南北に縦断しているアパラチアン山系に含まれる、シェナンドー国立公園の連山があり、一度山中に足を踏み入れれば、鹿の群などめずらしくなく、熊の姿までが2、30メートルほどの至近距離に現われるのである。到る処にキャンプ場や尾根歩きを楽しめるような遊歩道が整備されており、私も隔週ぐらいのペースで週末に家族と共にシェナンドー山中を散策した。こんな世界もあったのか、と驚嘆することばかりの別天地で、私はアメリカの広大な氣宇を存分に味わうことができたのである。

また、シャーロットヴィルの名が有名なのは、アメリカ第3代の大統領トマス・ジェファーソンが選んだ土地ということで、ここはいわばアメリカ精神の故郷のような所である。街から西南にちょっと出ると、郊外にジェファーソン大統領が息をひきとった私邸が大切に保存されていて、丘の上にある私邸を含む丘陵全体をモンティチェロと呼んで、さながらアメリカ国民の聖地のような感があり、今日でも遠く各地から大型の観光バスを何台も連ねてここを訪ねる人々はひきもきらないほどである。私の留学1年目の秋、ビル・クリントン大統領が第42代アメリカ大統領に就任する式典の祝賀パレードに当って、アーカンソー州知事をしていたロック・ビル市を発って、シャーロットヴィル市に入り、モンティチェロを就任式に臨むための出発地点に選んだことは記憶に新しいところである。当日のモンティチェロの式典には、現地の高校に通っていた私の末の子供も抽選に当ったということで、未明から家を出てこの式典に参列する榮に浴したことであった。

周知のように、トマス・ジェファーソンは、「アメリカ独立宣言」の起草者

であり、「アメリカ民主主義の父」として高い評価が与えられ、第16代大統領のアブラハム・リンカーンに次いで、ジョージ・ワシントン初代大統領と並ぶ国民的な人気のある大統領である。ワシントンD・Cのモール街の広大な広場を隔ててリンカーン・メモリアルのリンカーン座像は国會議事堂に向き合うが、ジェファーソン・メモリアルのジェファーソン立像は、大統領が住むホワイト・ハウスと向き合って建てられており、私には象徴的な風景に思われた。

このジェファーソンこそがUVAの創設者であり、初代の理事長である。ジェファーソンは大統領職を辞めてから、アメリカ国家の建設の礎は大学教育にあるという信念を秘めて、みずからUVAの学園を設計(1819年)し、その高い志を実現させた(1825年)のである。大学の中心部をなすロタンダの一群の建物はジェファーソンみずからが設型したが、今もその当時の原型をとどめている。今でも大学関係者はジェファーソンが建てた大学であることを誉りにし、ミスター・ジェファーソンと呼んで、この高邁な創設者を敬愛している。

今年(1994)の6月中旬、天皇皇后両陛下が訪米されたときも、15日(日本時間では16日)の1日、モンティչェロを訪ねられ、UVAで大学関係者との昼食会に臨まれたことが報じられた。ちょうど6月上旬2週間ほど日本に来られたグローナー氏も、日本仏教の研究者という資格で当日の昼食会に出席することになったということで、日程をくりあげて帰国された。グローナー氏はそのことを、大変名誉なことだ、と興奮氣味に話しておられたが、はたしてどうだったであろうか。8月下旬にはアメリカで再会できるのでそんなこともお尋ねしてみたいと思う。

また、シャーロッッヴィルから東北方に2時間も車で走ればワシントンDCに行き着けるし、途中にはシビル・ウォー(南北戦争)の有名なマナサスの古戦場跡もあり、東南方に同じぐらい行くと、アメリカ最初のコロニーが造られたウィリアムズ・パークに着き、その途中1時間ほどのところに州都のリッチモンド市があって、紹介したいことは山ほどあるが省略する。

UVAの学園生活

UVAの宗教学部は、グローナー教授のお話だと、現在(1994年3月)24名の専任教授がいて、その内訳はキリスト教が12名、仏教が4名、ユダヤ教が2名、イスラム教が1名、ヒンドゥー教が1名、アフリカの宗教が1名、その他に倫理学

が2名、宗教と文学が1名という構成であるということである。なかでも仏教の専任が4名もいる大学は全米でも他に例がないそうで、それだけヴァージニア大学における仏教研究の動向はアメリカの宗教学会でも注目されている。仏教を研究しておられる4名の方は、チベット仏教のジェフリー・ホプキンス教授 (P. Jeffrey Hopkins, ph. D. (University of Wisconsin), Professor Indo-Tibetan Buddhist Studies 1993—1994 ヴァージニア大学大学案内による。以下同じ)、日本仏教のポール・グローナー教授 (Paul S. Groner, ph. D. (Yale University), Associate Professor Japanese and Chinese Buddhism)、インド仏教のカレン・ラング教授 (Karen C. Lang, ph. D. (University of Washington), Associate Professor History of Religions: Buddhist Studies)、チベット仏教のディヴィド・ジェマーノ教授 (David F. Germano, ph. D. (University of Wisconsin) Assistant Professor History of Religions: Buddhist Studies) である。ホプキンス氏はいつも笑顔をたやすく温顔で人を迎える、それこそ敬虔なチベット仏教主義者で、政府にも顔がきく大物であるために、氏の研究室には毎年潤沢な予算が計上されるとのことであった。ホプキンス氏の力で、南アジアの仏教研究が盛んなばかりでなく、南アジア研究所では毎月定期的に各地の大学から高名な講師を招いて講演会やシンポジウムを開催するなど活動も盛んであった。

これに対して、東アジアの仏教研究はグローナー氏ただ1人ということもあるのか、外見的にはいま一つという感じがしないでもないのであるが、むしろそのほうがグローナー氏には好ましいと感じられている風であった。本当にいいものは誰れでも理解できるようなものではないというふうに達観しておられるようなところがあり、氏にとってそういうことはどうでもいいことなのかも知れない。グローナー氏の主催では、1年目の4月10日にイエール大学のワインスタイン教授の講演会があり、2年目の4月16日にイリノイ大学のピーター・グレゴリー教授の講演会²⁾ があった。ただ講義の方はどうしても中国・日本にまたがって広範な問題を概観するような一般的な講義内容にならざるをえないようで、アメリカの歴史とは異なる東アジアの仏教文化一般を学生たちに理解してもらおうという意図がグローナー教授の講義でも明確に知られた。

アメリカの大学は、秋期と春期の半年毎に単位を認定する、いわゆるセメスター (Semester)と呼ばれる制度をとっていて (スタンフォード大などでは3学期制

Trimester という），したがって各講座は日を変えて週に2時限ずつ割り当てられ半年で終ることになる。日本の大学では、同じ講義を1年間通して受講し、学期末試験で単位を認定する形式であるが、アメリカの大学のセメスター制だと、半年毎に新しい講義に変わるから、短期間のうちに一つの講座を集中的に学ぶことができるわけである。日本でもこのようなセメスター制を採用している大学や学部も2，3あるようであるが、回転が早く講義内容が更新するので、案外、今の学生たちの性急な学習意欲を満足させることになる好い一面もあるであろう。

したがって、私は週2日（火曜と木曜）昼食をはさんで2講座相当の、東アジア仏教関係のグローナー氏の講義を聴講することにし、アメリカの大学教育で行なわれている仏教研究というものがどのようなものであるのか、その実態をつぶさに知ることができたのである。

授業風景そのものは日本の大学と大差はないのであるが、一番違う点は、アメリカの学生はよく勉強し、教授の話を熱心に聞くという点である。特に、講義中、学生たちが一ことも私語をしないのには驚かされた。2年目のグローナー氏の秋期の学部の講義は、150名ほどの受講生があって盛況であった。「三宝」とか、「三乗」とかの話から始まり、中国の禪の話までを含む講義であったが、階段教場の最後列に坐っている私の視野には、真剣に学ぶ学生たちの姿があった。よく日本の若者たちにみられる、2，3人が頭を寄せておしゃべりしているような光景は皆無なのである。私はアメリカの大学生の姿にわけもなく感激したことである。どこでだって青年はこうでなければおかしいと思う。やはり、現代の日本はどこかがおかしいのではなかろうか。

こういえばきっと、アメリカの学生たちは足は組むし、コーラは飲むし、日本の学生のように行儀がよくないよ、と反論する人もいるだろう。私は、コーラを飲んでも、足を組んでも構わないと思う。アメリカでは種々の民族が入り混じっているから、服装だって、ヘアースタイルだって、人それぞれに違っていて当たり前なのである。それよりも何よりも、人の話にちゃんと耳を傾ける学生たちの姿こそが素晴らしいと私は思う。

アメリカ人は大人も子供も人の話をよく聞き、自分の意見をよくいう。ちょっとでも疑問があれば講義の途中でもすぐ挙手して教授に質問する。私は頭初はこの光景に異和感を感じた。しかし、見慣れるうちにこの方が自然なのだと思うようになった。人の話をよく聞いた分、わからないところや納得のいかないところ

があれば、それを質すのは当然であろう。話の腰を折られたとばかり、権威ぶる方がむしろおかしいのである。こんな場合、グローナー氏はどうするだろうと見ていると、学生の質問の内容を確認しながら実に丁寧にその学生が納得するまで説明しておられた。こういうちょっとしたことも人の話をよく聞くという原則を通じて両者の間に確固とした信頼関係があるから出来ることなのであろうと思った。質問一つ出ないで終るような日本の大学の講義のあり方は大いに反省すべきであろう。

講義の最終授業では、毎回、学生たちに受講生の立場からその講義がどれほどのものであったか評価する授業評価表が配布され、学生たちが教授の講義の内容から教え方までを総合的に評価することが行なわれていた³⁾。日本でも相当の大学でこの方式が採用されているようであるが、これも考えてみれば当然なことかも知れない。学生たちは自分が受講した議義内容をこうやって改めて評価する機会を得て、間接的に学生自身の受講態度や理解度までを反省することにもなるわけで、大学の講義における相方の責任や役割を認めて、こういう授業評価の様式を積極的にとり入れていこうとする、アメリカの解放的な精神風土は、私にはむしろすがすがしいものに感じられた。これぐらいのことは駒沢大学でもやろうと思えば今すぐにでもできるのではなかろうか。

UVAの附属図書館アルダーマン・ライブラリーは、大学に出た火・木曜を中心を利用した。私が見ることのできたハーバード大学、スタンフォード大学などの有名私立大学の図書館と比べると規模も小さく、閲覧室や書庫などの諸施設も小じんまりとしていたが、公立の大学図書館にしかない開放性があり、図書館業務のあり方について考えさせられた。

UVAの図書館は誰れでも自由に書庫に入りきりできるのである。子供連れの一般市民までが書庫に入って書架から自分の探している本を手に取ってみている光景は、まず日本では考えられないことである。それでいて館内は実に静肅そのものである。これで本がなくなったり破損したりすることがないなら、アメリカ人はよほど公共の財産に対するマナーができているということであろう。開館時間も、朝8時から夜11時半までということで、UVAの学生だけでなく、小中高生や一般市民までが幅広く利用できるような体制が整っているのである。私の家族も、子供の学校の宿題の資料を探しによくこの図書館を利用した。また、モール街にある市立図書館や、家の近くのアルバマール・スクエアにある児童図書館な

ども簡便に利用できるようになっている。図書館のような公共の場におけるアメリカ人の態度は実に立派で、大人も子供もおしなべて人の邪魔になるような振舞いは一切ない。静かに読書を楽しんでいる光景は私には信じられないほどであった。社会全体に公共のマナーが浸透しているのでなければ、こうはいくまいと思われることであった。

また、土地が広大だからできることであるといつてしまえばそれまでであるが、どこの大学の図書館も書庫のなかに閲覧室を設けており、それができなければUVAの図書館のように机と椅子があちこちに用意されていて、必要があれば一日中でもその場所で本を読んだり文章を書いたりすることができるので便利この上もない。私も随分ここを利用させてもらったが、こういうことも駒沢大学の図書館では想像することもできなかったことである。

東アジアの仏教関係の図書は、主にグローナー氏が購入するよう注文を出しているということであったが、基本的な研究図書は、辞書や全集など、私が利用して不自由を感じない程度には揃っていた。たまには、予算が充分でないということらしく『浄土宗全書』や『真宗全書』のような諸宗の全書はあったが、例えば『曹洞宗全書』などはまだ購入されていなかった。また、日本の大学の研究紀要など研究雑誌の類は、残念ながらほとんどなかった。東部では、ハーバード、プリンストン、イエール大学などの有名私大、西部では、カリフォルニア大学バークレー校などで、研究雑誌はすべて揃っているということであった。どうしてもみたい雑誌があれば、図書館に申し出ると、1週間ほどでコピーを手に入れることができるという。大学図書館相互の連系がコンピューターでつながっていて、この方面的サービスは想像以上に発達している。また、探している研究雑誌が全米のどこの大学図書館にあるか、検索のための雑誌目録が最近出版されたということを、2年目の3月上旬にスタンレー・ワインスタイン教授の御自宅をお訪ねした折に教えて頂いた。この目録は、“National Union List of Current Japanese Series in East Asian Libraries of North America” Compiled by Yasuko makino Mihoko Miki with the assistance of Isamu Miura Kenji Niki (Subcommittee on Japanese Materials Committee on East Asian Libraries, Association for Asian Studies, March 1992) である。

また、図書館の視聴覚資料室の方はいつも家族連れの利用者で満員であった。各国の映画ビデオが揃っていて、図書館の証明書（ソシアル・セキュリティーフォーム）

と、宛名と住所が書かれている郵便封筒を持参するだけで誰れでも簡単に作れる) をみせるだけで、その場で自分の好きなビデオ映画がみられるようになっていて、日本映画のビデオも70本ほど入っていた。『たんぽぽ』や『マルサの女』など、伊丹十三作品はアメリカ人にも人気があるということであった。大学の構内にも小さな映画館があり、定期的に名作映画が上映されていたし、街にも5、6軒の映画館があって、テレビが普及しているにも関わらず、アメリカ人はよく映画をみていた。今でも洋画に話題作が多い秘密はこういうところから始まっているのであろう。2年目には、話題になった『ライジングサン』もモール街の映画館で上映されていた。

グローナー邸のこと

街の東北にあった私の家からは、車で25分ほどかかったが、街の西北のウェスト・ウッド地区パインデールにグローナー氏の邸宅がある。3年ほど前に約30万ドル(日本円で3千2、3百万円程度で、夢のよう)ちょっとの値段で購入されたという話であったが、その名の通り樹令数十年はする高い赤松の林にかこまれた小高い丘の上に瀟灑な屋敷が立っている。

グローナー邸を舞台にした思い出は書き出すことができないほどであるが、前と後に私の歓送迎会を含め、家族ぐるみでショッちゅうパーティーにお招き頂き、大変な散財をおかけしたことであった。こういう各種のパーティーでは大抵、めずらしいお客様にひきあわせて頂き、アメリカ人の社交的な作法や生活様式を勉強させて頂いた。思い出すまま列挙しても、UVAでグローナー氏が主催したワインスタイル氏の講演会の夜は、ホプキンス氏と後に紹介するチャックさん、山中さんの2人の大学院生と一緒にお招きにあづかった。また、インドネシア音楽のガムラン音楽の演奏会(令夫人のシンディー・グローナーさんは、学生時代に東京音楽大学に留学され、故小泉文夫教授の指導を受けられた音楽家で、グローナー邸はシャーロットヴィル・ガムラン協会の本部でもある。また、グローナー教授は令夫人の弟子でガムランの名演奏家でもあった)は西南の郊外にある財産家のお屋敷の前庭で開かれ私其も家族で招待にあづかり、渡米早々に異文化の音の洗礼を受けたのであったが、翌日にはジョージス・フレッグス教授(スイス人でチベットに8年おられて、ゲシュの資格を取得。UVAでチベット仏教を講じられていたが、半年後にはマサチューセッツ州の Williams College に移られた。末木教授は教授の家に下宿されていた)

とお引き合わせ頂いた。また、シャーロットヴィルの西方、車で1時間ちょっとの距離にあるレキシントン市にあるワシントン・リー大学に移籍されたばかりの日本の新宗教の研究で高い評価を受けているディヴィット・ウィンストン教授御夫妻ともお会いした。1年目のサンクスギビングデイには、隣州のメリーランド大学で言語学（日本語）を研究しておられ、グローナー教授とはイエール大学以来の親友というラムジー教授御夫妻と御家族ともお会いした。また、プリンストン大学に招かれ秋期の半年間、日本仏教を講じておられた茨城大学の今井雅晴教授（中世浄土教研究）御夫妻と御家族にもお会いした。また、ガムランと影絵劇のタベでは、日系アメリカ人のジャネット・池田教授（Janet Ikeda-Yuba プリンストン大学の大学院を終えてすぐUVAに就職が決まった秀才で、日本中世文学、特に細川幽斎の研究者。夫君ケンサク・ユバ池田氏はブラジルの日系2世で、大谷大学の大学院に留学されインド仏教を研究され、真宗の海外布教師。目下、アメリカ国籍を取得するため英語を猛勉中）の御家族などなど、多くの方々と交友を深めることができたのである。

その他では、毎週月曜日の朝9時30分～12時30分の3時間、このお宅の書斎でそれこそ思うままに雑談を交じえながら読書にふけったのである。渡米した年の4月、5月の2ヶ月は、それまで大学院の授業で読んでいた『律宗綱要』の演習に途中から参加させて頂いた。アメリカでは大学院の講義を教授の自宅で行うということはめずらしくなく、よくあるらしかった。これなども形にとらわれぬ実質本位のアメリカならではの講義風景といえよう。『律宗綱要』の演習には、この学期で大学院を修了するチャックさんと山中修吾さんの2人が出席していて、私が加わっての4人であったが、この演習はわずか数回で終った。その後、私が滞在していた2年間は、グローナー氏の下には指導を希望する大学院生は入学して来なかつた。私が帰国した年の秋期には、4、5人の受験生が申し込んでいるということで楽しみにしておられたが、その後はどうなつたであろうか。

チャックさん（Chuck Jones）は今はフルブライトの奨学金を受けて台湾に留学中で、智旭教学の研究者として著名な張聖巖師の下で現代中国の仏教を研究しているということである。日本人の留学生である山中修吾さんは、カリフォルニア大学バークレー校からUVAの大学院に入った秀才であるが、グローナー氏も舌を巻くほど英語が達者な好青年であった。顧みて、私のアメリカ生活が大した支障もなく順調に始められたのは、前記の浅倉教授と山中修吾さんのお二人のお

蔭によるところが大きかったと感謝している。山中修吾さんのいとこの山中忠夫さんがボストン在住ということで、6月の末には1週間お二人の案内でボストン観光の旅をした。私共の家族につききりで、2人で観光名所を手際よく案内して頂いたことを昨日のことのように思い起す。山中修吾さんはその後間もなく日本に帰られ、父君が天理教の幹部であられるということで天理高校の英語の教諭になつておられるということである。こういう若い先生に英語を教わる高校生はどんなに幸せなことだろうとつくづく思う。

『律宗綱要』の演習が終った後は、グローナー氏の指導学生もいないということで、2年間はそれこそグローナー氏と差しで好きな本が読めたわけで私にとっては幸運であった。せっかくなので、グローナー氏の専門である日本天台に焦点をしぼり、中古天台本覚法門の形成とその特質を究明することを課題にして、1年目は『漢光類聚』4卷⁵⁾を、2年目は安然の『胎藏金剛菩提心義略問答抄』5卷⁶⁾を精読することができた。

日本中古天台の研究の必要性は、最近とみに、道元研究や日蓮研究の領域から注目され出しており、種々の議論が交わされていて一見活況を呈しているが、研究の本質はどこまでいっても原著・原資料を厳密に解読するということが大前提でなければならない。そういう地道な研究を軽視したのでは、どんな高邁な議論も所詮は研究者の勝手な議論で終るしかないだろう。私が『道元学の摇籃』(1990年1月大蔵出版)を刊行したとき大正大学の碩学大久保良順教授に本を献呈させて頂いたのであるが、そのとき大久保氏から頂いた返信に、「天台本覚法門はこの本の中でいわれているような浅薄なものではない。もっと正当な評価を与えると、日本佛教の本質はみえて来ないのでないか」というような批評が書かれていた。それからずっと私はこのような視点を気にしていたわけであるが、アメリカ留学という絶好の機会に、日本佛教とは何か、中古天台本覚法門とは何か、ということを集中的に考える機会を得たことは幸いであった。私は今、次第に、大久保氏の御意見のように、中古天台に対するマイナス評価一点張りの従来の先入観は改める必要があると考えるようになっている。

この読み会は、グローナー氏が原文の英訳に註釈をつけたペーパーを毎回作られ、私が日本語で原文を読んだ後で、そのペーパーにそってグローナー氏が解説され、原文中の問題個所をそのつど点検し、議論しながら原文の読みを定めていくという方法で進めていった。不遜にも、渡米前の私はアメリカの佛教学者がこ

れほど日本仏教の文献が読めるなどとは思ってもみなかったことなのである。グローナー氏の原典の読み解力は実に正確無比で、伝統的な漢文読みなども流暢にこなされるのには私も舌を巻いた。日本人の研究者がわかったつもりで読む以上に、アメリカ人の研究者は原文を英訳にして考える分だけ原文の微妙な呼吸の違いがよく見えるのであろう。グローナー氏から教わったことも多かったし、問題点に関する議論なども卒直に交わせて、日本においては体験できない実際に有意義な共同研究ができたと、深く感謝している。

グローナー氏は、この共同研究の成果の一端を後に記すワシントンD・Cで開催されたAARの学会で発表された。アメリカの学会では『漢光類聚』に関する研究はこれが最初である。私の方も、できるだけ早い時期に、グローナー邸での共同研究の成果をまとめて公けにしたいと考えている。

諸学会に参加して

アメリカ留学中に、私はグローナー氏に伴なって諸種の学会に参加することができ、第1年目に掲げた「USAにおける東アジア仏教の研究動向についての実態調査」という課題は私なりに満足できる成果を得ることができた。直接、アメリカやカナダの仏教研究者と会い、親交を深めることができ、アメリカやカナダにおける東アジア仏教の研究の現在を知ることができたのである。

私が参加した学会は、(1)アメリカ宗教学会(AAR)で、1992年11月21日～24日にサンフランシスコで開催されたものと、(2)1993年11月20日～23日にワシントンD・Cで開催されたものと、2回、出席した。また、(3)アジア学会(AAS)に、1993年3月25日～28日、ロサンゼルスで開催されたものに参加した。また、(4)1994年3月16日～20日、私の帰国真際のことであったが、カナダ国トロント市近郊のハミルトン市にあるマクマスター大学が主催した「日本仏教の僧院生活と仏像」(拙訳)と題する学会に招待を受けて参加した。

(1)先ず、サンフランシスコのヒルトン・ホテルで開催されたAARの学会では、学会前日に、スタンフォード大学を訪ねカール・ビュールフェルト教授や、バーナード・フォール教授とお会いし、大学院に在籍するマーク・海野さん(明惠研究)、ハンク・グラスマンさん(恵心僧都の母に関する文学研究)、ディビッド・ガーディナーさん(空海研究)、ジル・フロンスダルさん(ゼンセンターで毎日坐禅をしている実践的研究)が、入れ替わり立ち替わり交替で、構内や市内観光に案内し

て頂いた。夜はこれらの諸先生方が中華料理屋に集い私1人のために遅くまでおもてなしして頂いて大変、恐縮したことであった。また、学会2日目の22日（日曜日）は、学会に参加したイエール大大学院生のジャッフィーさん（Richard Jaffee 近代日本仏教研究）がそのためにわざわざ友人から車を借りて來たということで、私をサンフランシスコ禪センター（300 Page Street San Francisco. CA 94102）と、ちょうどこの日再建された坐禪堂の開單式（Zendo Opening Ceremony）と20周年記念式典とが行なわれたサンフランシスコ郊外の青竜禪寺（Green Dragon Zen Temple Green Gulch Farm 1601 Shorline Highway Sansalito CA. 94965）まで御案内頂いた⁷⁾。アメリカ人の直裁的で行動的な親切には感心させられることばかりであった。

アメリカの大きな学会はみな、大学ではなくホテルを会場にして行なう。大会参加費は80ドル程度であるから、その頃の日本円にすれば1万円ほどの感じである。アメリカ人の金銭感覚（例えば、家庭教師代は1時間20ドル。研究書でもたいてい3, 40ドルほど。シャーロットヴィルの銀行の自動支払機は引出し最高限度額が300ドルで1日1回しか引き出せない）からは、決して安くはないのであるが、学会に参加する研究者は事務的なことには一切タッチしないから、会員は存分に学会を満喫することができるのである。日本でもこういう点は見習ったらどうか。学会開催校の負担が大きすぎるようなことはないであろうか。学会でもなければ、めったに会う機会のない研究者が広いアメリカの各地から集まって來るわけであるから、その賑いは大変なもので、さながら学者の運動会の体で、一緒にお茶を飲んだり、食事をしたり、酒を酌み交わしたりして、相互の交流を深め、情報の交換に余念がない。

なかでもイエール大学のワインスタイン氏はお元気で、氏の泊まつておられるホテルの一室は、毎晩、門下生外、多数の仏教学者たちが集まり、スコッチやバーボンのボトルを2, 3本空にするまで歓談し、その後で街にくり出して、食卓を囲みながらまた一しきり談笑するというふうで、ベッドに入るのが1時、2時などということも再三であった。こういう酒の飲み方はどうも日本流のようで、（ただし、口論になったり、激高するようなことは決してなかった。アメリカは酒の席のことなどといって済ませるような社会ではなく、アメリカのインテリはアルコールには驚くほどきれいだった）ワインスタイン氏やグローナー氏にとっては、学会で会えることが唯一の楽しみになっていて、こういう機会に若き日の情熱を確認しあい、新

たな研究意欲をかきたてる刺激済のようなものなのであろう。ヒシと抱き合って別れを惜しんでおられる師資のお二人の様子を傍で拝見していて、私はそんなことを感じていた。

アメリカの学会における研究発表は、日本の宗教学会や印度学仏教学会の発表形式とは大分趣きが違う。それぞれの部会が掲げる1つの課題について参加者全員が考え、討論するという形が一貫していた。発表が終ると予め定められている応答者が、発表者の見解を詳細に批評して問題点を整理し、その後で参加者の意見を求めるという発表形式である。そのために大会当日までに発表者は互いに自分の発表原稿のコピーを提出して、応答者を含めて互いの論文を熟読しておくわけである。

また、毎回試みられて来たようであるが、大学で仏教を講義していく気がついたことを報告し合って、よりよい仏教の授業法を模索するという、この種の部会は斬新なものであった。サンフランシスコの学会では、仏教の授業で『法華經』をどのように教材として利用できるか、という問題を討論していたし⁹⁾、ワシントンD・Cの学会では、講義室で行なわれる禪の授業のあり方について熱心に議論が重ねられていた¹⁰⁾。こういうテーマを設定し、研究者として、大学の教員として、仏教を学生たちにどう教えたらいいか、という具体的な問題を日頃から考え、よりよい解決の方向を探って積極的に議論するアメリカの仏教学者たちの態度は、日本の学会でももっと学ばなければならない点だろう。

また、話題性の高い新刊書をとりあげて、隣接の研究をしている学者が一同に会して批評し合うという部会も注目された。著者は応答者として同席し、批評者のすべての見解に反論したり、自分の意見を加えることが許されているので、どこまでも討論の公平性はたもたれるわけである。サンフランシスコの学会では、バーナード・フォール教授の評判が高かった新著“*The Rhetoric of Immediacy*”¹⁰⁾がとりあげられ、ワシントンD・Cの学会では、デイビッド・エッケル教授の“To See the Buddha”¹¹⁾がとりあげられていた。

サンフランシスコの学会では、なんといってもワインスタイン教授の還歴記念の意味をこめて（グローナー氏談）、門下生の研究者が企画した、2部に分けての共同のパネルで行なわれた研究発表が出色で圧巻であった¹²⁾。いずれ劣らぬアメリカの仏教研究の現在の水準を示すものといえ、中国・日本にまたがる幅広い問題が扱われていた。ワインスタイン教授は徹底して歴史的に資料にもとづいた実

証的な研究法を指導されたということで、門下生の方々はみな忠実にその研究方法を踏襲しておられるようである。グローナー教授なども思弁性の強い研究には関心を示さず、冷淡すぎると感じられるほどの評価しか与えておられなかつた。

(2)第2年目のワシントンD・Cで開かれたAARの学会は、シェラトン・ホテルと、オムニ・ホテルが会場であった。

この学会では、我が駒沢大学の袴谷憲昭教授が提唱した「批判仏教」の研究動向に関する部会¹³⁾が設けられ、日本から松本史朗教授が来られて発表された。オムニ・ホテルの発表会場で松本氏御夫妻のさわやかなお姿を拝見し、日本を出でから2年ぶりの学部の同僚との再会は私にとっては実になつかしいものであった。前日、ニューヨーク・シティの観光をされ、当日DCに着かれたということで少々お疲れのごようすであったが、御発表の方は、遠来の賓客ということで質問が集中した(本覚法門の部会では永富教授のその場にふさわしくない質問を集中的に受け、この部会に出席しておられた松本氏は答弁のためここでも演壇に立つはめになった)にも関わらず、日頃の御見解を諒諒と披瀝され、美事に大役を果たされていた。このようすを拝見して、これから日本の仏教学者はアメリカの学会に限らず、外国の関係の学会にどんどん出かけていって、必要があれば自分の所信を表明するぐらいの国際的に積極的な態度も要請されるであろうと思った。袴谷氏が創った「批判仏教」という用語は、アメリカの学会でも大分、認知されたように感じたが、その展望に関しては発表者のなかでも評価は分かれていたようで、大方の人々は静観しているといったところであろう。このパネルについては松本氏御自身が、帰国後、学内の研究会で報告されたと伺っているのでこれくらいにしたい。

私にとっては、この学会は私の滞米に合わせて頂いたのではないかと錯覚するほどのタイミングで、アメリカにおける天台学の研究の現在を総合的に知ることができたまたとない絶好の機会となったのである。研究発表のみならず、発表された方々とは、学会の開催期間中、何度も昼食や夕食を共にし、お茶を飲み、酒を酌みかわしながら、最近関心がある研究などについても踏み込んだお話を伺うことができ有意義であった。

中国天台の部会では、ワインスタイン氏の司会で、ポール・スワンソン、リンダ・ペンカワー、ダニエル・ゲット、ダニエル・スティーブンソンの4氏が、そ

それぞれ智顕と湛然と知礼に焦点をあてて発表され、デイヴィッド・チャペル氏が応答者で総括批評をされた¹⁴⁾。

また、日本仏教の本覚法門の部会では、ルーベン・ハビト氏の司会で、ポール・グローナー、末木文美士、ジャクリーン・ストーンの3氏が発表され、松尾剛次、永富正俊の2氏が応答者として各自の意見を開陳されていた¹⁵⁾。

(3)次に、アジア学会(AAS)は、ロサンゼルスのウェスティン・ホテルで開催された。一般的にいようと、AASは3月下旬、AARは感謝祭の前の週末に開催されることに決まっているそうで、AASの方はアジア全体に関わり、歴史や政治、現代の問題までをとりあげるのに対して、AARの方はキリスト教研究を中心的存在である宗教学会であり、アメリカにおける仏教学会はこのAARに含まれているということである(グローナー氏談)。したがって、アメリカの仏教学者はAARの方を重視し、発表者も参加者も多いようであるが、このAASの方は、歴史研究や美術研究の学者に人気があるようである。そうはいっても、私がこの学会でお会いした方々は、みなサンフランシスコのAARの学会で一度お会いしたことのあるなつかしい面々で、私にとっては、格別、違いはなかった。日本の仏教の革新運動に関する部会¹⁶⁾では、ジョージ・タナベ氏の司会で、ジャックリーン・ストーン、ロバート・シャーフ、アイアン・リーダー、バイロン・エアハルトの4氏が発表され、討論参加者はネイル・マクミラン氏であった。

また、浄土教と中世仏教の部会¹⁷⁾では、永富正俊氏の司会で、アラン・アンドリュース、町田宗鳳、ジェイムズ・ドビンス、ジェイムズ・フォードの4氏が発表し、ジャックリーン・ストーン氏が4氏の発表を総括批評した。

この学会では、各部会の研究発表が終った後に、大学院生が発表する特別部会¹⁸⁾が設けられていた。スタンフォード大学大学院の最終年度にあたるガーディナーさん(David Gardiner)が、これまで続けて来た空海の研究をまとめて発表した。他にもコロンビア大学大学院を終るバローニさん(Helen Baroni)が隠元の研究を発表した。学会に参加した全国の教授たちが新進の学者の発表を聞きに集まり、研究方法に関する助言や質問をして将来の研究を励ましている光景は、いかにもすべてはこれからというアメリカの仏教研究の若々しさを感じさせ素晴らしいかった。このような学会での発表は、就職をひかえた大学院の学生にとっては、就職運動の前哨戦のような感じで受けとめられている一面もあるようであった。

(4)マクマスター大学の学会参加は、一重にシャーフ氏の御厚意によるもので感謝に堪えない。グローナー氏に学会発表の依頼があった時点で、私にも同伴するようおおせつかったのであった。仏教美術の学会ということで私の発表はおことわりしたが、マクマスター大学の大学院生の研究に対する助言者というような資格をつけて頂いてお招き頂いたのであった。航空券の手配から宿泊、食事にいたるまで、滞在期間中の一切のお世話を頂くといった徹底した御心配を頂いたわけでマクマスターの大学当局並びに大会関係者に対して深く感謝申上げる次第である。シャーフ氏は、退職された冉雲華氏の後任として採用になられたということで、斬新な日本仏教の研究を進める気鋭の研究者としてアメリカの学者も注目している。シャーフ氏の案内で、附属図書館の書庫に入り、冉氏が熱心に集収されたという東アジア仏教関係の充実した蔵書を拝見させて頂いた。冉氏には初日にお会いすることができ、沢山の玉稿抜刷を頂載した。

16日夜、前夜祭ということで大会参加者の歓迎晩餐会があり、その後、ミミ・ヤンプラクサワン氏の中尊寺に関する講演¹⁹⁾があった。

17日夜、ドナルド・マッカラム氏の清涼寺釈迦と善光寺如来についての講演があり、これが学会の開会式であった。この日の昼は、大学当局者が主催する昼食会が行なわれ、その前後は大学を案内して頂いた。

18日午前は、ロバート・シャーフ氏の真言宗の修法におけるマンダラの意義に関する研究発表を最初に、エリザベス・グロッテンハイス氏、アイアン・アスレー氏の3氏の発表があり、午后は、ジェームス・ドビンス氏、綿織亮介氏、バーナード・フォール氏、グリフィス・フォーク氏の4氏の発表があった。

19日午前は、ネイル・マクミラン氏、百橋明穂氏、マーティン・コルカット氏の、午后は、カレン・ブロック氏、ポール・グローナー氏、ドナルド・マッカラム氏、ミミ・ヤンプラクサワン氏の発表があった。

各発表毎に、2人づつ応答者がつき、したがって討論は白熱したものがあった。私の印象では、美術の研究者は教理には無関心であるか、冷淡であって、直接、仏像の美しさを問題にする傾向にあり、仏教の研究者は仏像の意味を教理的背景から説明しようとする傾向があり、相方の立場の違いから互いの研究方法を全く無意味であると断言するような場面もあり、大会会場が一瞬ざわめくような場面もあった。また、仏像の体内を空洞にすることは、仏教の空の思想と関係があるのでないかといふような論を展開した発表者に対し、それは造像における

単なる技術的な問題でしかないというふうな仏教美術研究者からのもっともな反論があった。ただ、この大会を全面的に企画運営されたシャーフ氏の発表に象徴されるように、研究領域や研究方法における立場の相違ということで片付かない切実な問題が横たわっているということも確かで、氏のように自分で実際に真言の修法を体験して、両部マンダラの図像は修法における観想の対象であるというような従来の考え方は正しくなく、むしろ密教における両部の教理思想を図像学的に整理する仕掛けと考える方が正しいのではなかろうか、という問題提起は、今後相方の側から検討されなければならない重い課題のように感じた。綿織氏が、「アメリカ・カナダにおける仏教美術の研究は、日本では自明のこととされているような基礎的な知識がまだ充分、浸透しているとはいえない状況である」というようなことを、私にぽつりと漏らされたのが印象的であった。まだ研究の緒についたばかりというような一面もあるのであろう。

この学会ではずっと通訳など種々のお世話を頂いた篠原享一教授とお会いできた。篠原氏は東京大学で宗教社会学を学ばれ、カナダに渡って今はマクマスター大学の新進の宗教学者として御活躍である。最近は智顗の伝記資料を、共同研究で政治・社会・経済・宗教史的背景から読みなおしておられるということで、注目される。

20日は、英王室オンタリオ博物館（The Royal Ontario Museum）を見学し、夜は日本料理店で盛大な送別会をして頂き、大会に参加した研究者の一人一人と再会を期して別れを惜しんだことであった。

余 話

私に与えられた紙数はすでに大幅に超えているので、この辺でやめなければならないが、最後に、このような貴重な機会が与えられなかったら絶対に経験できなかっただろう2、3のことを最後に附記しておきたい。

まずは、日本から運んでいった『現代語訳正法眼蔵隨聞記』（平成5年（1993）8月大蔵出版刊）と、『摩訶止観』全巻原文校訂現代語訳・注釈研究（平成6年度中、大蔵出版刊行予定）との2つの大量の原稿をまとめることができたことである。これは、2年もの長い間、大学の業務から解放して頂き、アメリカに留学させて頂いた恩恵の賜物以外の何物でもない。帰国早々、NHKの方から、ラジオ放送で10月2日(日)からの毎日曜、半年間、25回連続で『瞑想のすすめ—摩訶止

観を読む』という題で放送してみないかという話があり、目下その準備をしている最中であるが、これも帰国報告の1つとなるであろう。

また、週末は勿論のこと、夏期・冬期の長い休暇を利用して、気が趣くままに家族と大型の車に乗ってアメリカ各地を旅行して回った。冬休みは2年続けて、フロリダ州のマイアミビーチに遊びに行き、アメリカの最南端に位置する夢のように美しいキー・ウェスト島までドライブした。この島は『老人と海』の作家ヘミング・ウェイが8年間も住んだところで、ヘミングウェイの記念館などもある。この旅の途次では、アトランタ、オーランド、チャールストンなどの古い街やレジャーランドを訪ねることができた。また、1年目の夏休みにはボストン旅行ができたし、2年目の夏休みは3週間ほどかけてアメリカ横断の大旅行を楽しんだ。アメリカ横断旅行では途次、ナッシュビル、オクラホマシティー、サンタフェ、セドナ(フラッグスタッフの南)、サンタモニカ、サンフランシスコ、ソルトレイクシティー、デンバー、トペカ、レキシントンなどに泊まり、エルビスの家を記念するグレイスランド、グランドキャニオン国立公園、ラスベガス、ヨセメテ国立公園、ローキー山脈国立公園などなどの観光地に立ち寄ることができたし、ニューメキシコ州・アリゾナ州の2州では、プエブロ、ホピー、ナバホなどのインディアン居留地の奥深くに入ることができ、アメリカ原住民の生活振りを直接見聞することができた。東部の豊かな白人社会と比べるまでもないほど生活の格差は歴然としており、大国がかかえている困難な問題を垣間見る思いであった。

このような旅行の途次に立ち寄った博物館や美術館などもかなりの数になり、つまる話もあるが、ここにはその一端を記すだけにしたい。ワシントンD・Cのスミソニアン協会のフリーア博物館を訪ねたとき、未知の資料に出会い、一瞬釘付けになった。詳しい調査がいるであろうが、博物館の年代推定に間違いがなければ、1095年のものというからこれはかなり早い時期に出来た『延命十句觀音經』の原形というべきものである²⁰⁾。

どのような用途で作られたものか判らないが、供養のために奉納されたかと思わせられるような石板で作られたレリーフ様のものである。それはフリーア博物館の第17展示室にあり、第18展示室と隣り合わせの白い壁面に埋め込まれるようにして展示されていた。説明を読むところである。

Guanyin of the Water moon

Northern China

Northern Song dynasty

dated 1095 stone 14.56

上部に水月観音像と認められる像が刻まれ、下部に左から右へ刻まれている文章の左半分に、このような呪文が示されていた。

觀世音聖呪	南無觀世音	因	與	仏	法	相	緣	常	樂我淨朝念	觀世音暮念	觀世音念念	從緣起念	不離心	仏

(平成6年7月下旬脱稿)

注記

1) このときの在外研究報告は、吉津宜英「アメリカ仏教学管見」（駒大仏教学部論集17号・昭和61年）に詳しい。参考されたい。また、平井俊栄「新北米大学事情—U・B・Cとアメリカの大学—」（同論集8号・昭和52年）、袴谷憲昭「マジソン滞在記」（同論集14号・昭和58年）の先行する報告があり、後には、佐藤達玄「ハワイ仏教の現状」・大谷哲夫「ハワイ大学にて」（共に同論集23号・平成4年）の報告がある。

2) 当日の演題は、Stanley Weinstein (Yale University) "When the Gods Met the Buddha: Religious Syncretism in Early Japan" で、記紀資料を中心に仏教伝来時の日本古代の宗教を論じた。Peter Gregory (University of Illinois) "Chan Ritual During the Tang Dynasty: Tsung Mi's Perfect Enlightenment Retreat" は、宗密の『圓覺經道場修証儀』における坐禪作法の意義について論じた。

ワインスタイン氏には、その後も2回のAARの学会でお会いしほとんど御一緒させて頂いたし、帰国前の3月11日～14日の間、グローナー氏に伴ってニューヘブンにある先生の御自宅に泊めて頂いて、2晩続けて催されたパーティーでは、イエール大学大学院生や、イエール大学の宗教学部の教授と歓談することができ有意義であった。このときの一齣を、『禅の友』7月号（平成6年7月・曹洞宗宗務庁）誌上で、「アメリカで会った仏教者たち」と題し随筆文を書いた。また『禅の友』平成4年7・8・9・10月号で、連載の「ほとけをおがむ・しやりらいもん」のなかに渡米直前から4ヶ月間で体験した出来事の一端を報告した。

また、グレゴリー氏には帰国後お会いすることができた。吉津宜英氏が奔走して実現した「Peter. N. Gregory 先生を囲むシンポジウム」（5月27日（金）2時～5時30分・駒沢大学大学会館2階。後、中華料理店で宴会）に、末木文美士・石井修造・松本史朗

・石川力山諸氏と共にスピーカーの1人として参加させて頂き、私は「道元の円覚経の引用解釈からみた中古天台本覚法門の問題」と題して私の意見を表明する機会にめぐまれたわけであるが、これはグレゴリー氏の長年にわたる『円覚経』研究に対する答礼の意味もあった。

3) この“Evaluation Form”は、参考までに、そのすべてを掲げておこう。

DEPARTMENT OF RELIGIOUS STUDIES

COURSE/INSTRUCTOR/TEACHING ASSISTANT EVALUATION FORM

Course Number: REL _____

Date: _____

Class: 1=A, 2=B, 3=C, 4=D

Major: A=Religious Studies, B=Other

Overall GPA: A=3.0 and above, B=2.9 and below

I. Please rate the following statements on a scale from A through E, where each letter signifies the following:

A excellent

B good

C fair

D weak

E poor

- 1. How would you rate this course overall?
- 2. Instructor intellectually stimulates me to think and learn
- 3. Instructor appears enthusiastic about the course content
- 4. Instructor presents material clearly and understandably
- 5. Instructor's preparation and organization of each and every class session
- 6. Overall course objectives clearly stated and understood
- 7. Pertinence and value of written assignments
- 8. Appropriateness of text and reading materials
- 9. Fairness of examination/quiz questions
- 10. My probable grade in the course based upon work completed thus far
(mark A = A through D = D)
- 11. Effectiveness of course in helping me to gain factual knowledge
(terminology, classifications, cultural/historical data and trends)
- 12. Degree to which this course has contributed to my learning of fundamental principles, theories, and methods.

- 13. If this course includes writing assignments (book review, short papers, term papers, take-home questions, etc.) or oral presentations, how would you rate the course in contributing to the development of your skill in expressing yourself orally and in writing?
- 14. Availability for help outside of class

II. COMMENTS: What would you tell a fellow student about this course and the instructor? Could the course be improved?

III. COMMENTS ON DISCUSSION SECTION (if applicable):

Name of teaching assistant _____

- 1. Did the TA lead discussions effectively without dominating them?
- 2. Was the TA prepared and organized?
- 3. Did the TA relate the discussion sections to the lectures and other aspects of the course?
- 4. Did the TA demonstrate familiarity with the material under consideration?
- 5. Did the TA provide helpful and clearly stated comments on papers and examinations?
- 6. Did the TA grade fairly?
- 7. Was the TA available for consultation outside the discussion section?

Further comments:

- 4) 平川彰訳註『律宗綱要』をテキストに使っていた。
- 5) 『天台本覚論』（日本思想大系9・1973年・岩波刊）に入っている『漢光類聚』をテキストに使った。ちょうどこの年に、『日本中国一佛教思想とその展開』（平成3年・月・山喜房刊）を花野充道氏がアメリカまで献本して下さり、氏の「日蓮の唱題思想と檀那流の灌頂玄旨口伝」と題する論稿を拝読させて頂き、本覚法門関係資料の研究態度について種々教えられるところが多かった。また、『漢光類聚』について、日本では佐々木俊道氏が「漢光類聚の成立をめぐる覚書」（曹洞宗・宗学研究所紀要4号・平成3年3月）「天台伝南岳心要について」（宗学研究所紀要5号・平成4年3月）「洞門における本覚法門研究の諸問題一『漢光類聚』をめぐる付論」（宗学研究34号・1992年3月）などの一連の研究を進めていることが注目された。中古天台の観心勝の運動は『摩訶止観伊賀抄』（『続天台宗全書』顕教I・2・平成2年12月・平成3年11月・春秋社）にみられる天台止観の研究動向などを合わせて、総合的に再検討すべき課題があるようである。
- 6) 『胎藏金剛菩提心義略問答抄』5巻は、大正藏経75巻所収本をテキストにした。この本は安然が45歳のときに著わした、大正藏経で約百頁に及ぶ力作である。『教時間答』

『教時諍論』と並ぶ天台密教の優位性を明らかにしたものであるが、題名通り「菩提心」の何たるかを、天台典籍や密教典籍のみならず、『蓮華三昧経』や『円覚経』など後世の本覚法門で盛んに引用する經論を引用しながら論を展開している。中古天台本覚法門の研究は安然の天台密教学までを視野に入れないと充分でないだろう。ただ、グローナー氏との共同研究でも、事相に関する部分は読み切れず、宿題として残して来たことであった。

- 7) この禅センターのこととは、前記の大谷哲夫氏の報告に詳しいので参照されたい。
- 8) 部会名は‘Academic Teaching and Study of Religion Section and Buddhism Section’であり、討論参加者は次の人々である。

Peter N. Gregory (University of Illinois) Presiding
 Theme: The Lotus Sūtra as a Vehicle for Teaching Buddhism
 Panelists:

William Deal (Case Western Reserve University)

Paul Groner (University of Virginia)

Helen Hardacre (Harvard University)

Daniel Stevenson (University of Kansas)

Jacqeline Stone (Princeton University)

Willa Jane Tanabe (University of Hawaii. Waialua)

Chun-fang Yu. (Rutgers University)

Respondent: Luis O. Gómez (University of Michigan, Ann Arbor)

- 9) 部会名は、Buddhism Section で、討論参加者は、次のような人々であった。

Miriam Levering (University of Tennessee, Knoxville) Presiding
 Theme; Teaching Zen in the Classroom; Major Approaches
 Panelists;

Dannis Lishka (University of Wisconsin, Oshkosh)

Griffith Foulk (University of Michigan)

Carl Bielefeldt (Stanford University)

Robert E. Buswell. Jr. (University of California. Los Angeles)

John Maraldo (University of North Florida)

Victar Hori (University of Toronto)

- 10) 部会名は、Buddhism Section で、発表者は次の人々であった。

Robert E. Buswell. Jr. (University of California, Los Angeles) Presiding
 Theme; A Discussion of Bernard Faure's The Rhetoric of Immediacy
 Panelists; Luis O. Gómez (University of Michigan. Ann Arbor)

Robert H. Sharf (McMaster University)

T. Griffith Foulk (University of Michigan, Ann Arbor)

Janet Gyatso (Amherst College)

Respondent; Bernard Faure (Stanford University)

11) 部会名は、Buddhism Section で、発表者は次のような人々であった。

Collett Cox (University of Washington) Presiding

Theme: A Discussion of Malcom David Eckel's To See the Buddha: A Philosopher's Quest for the Meaning of Emptiness

Panelists;

John Makransky (Boston College)

Charles Hallisey (Harvard University)

Miriam Levering (University of Tennessee, Knoxville)

Robert F. Campany (Indiana University, Bloomington)

Respondent: Malcolm David Eckel (Boston University)

12) 部会名は、1部は Chinese Religions Group で、発表者と発表内容は次のようにあった。

David Kalupahana (University of Hawaii, Manoa) Presiding

Theme; The Buddhist Vinaya in China and Japan (part I)

John R. McRae (Cornell University)

Tao-hsuan's Visions of Jetavana and the Ordination Platform Movement in T'ang China

David W. Chappell (University of Hawaii, Manoa)

The Platform Sūtra's Formless Repentance in Comparative Perspective

Timothy H. Barrett (University of London)

The Lin-huai Ordination Scandal in Historical Perspective

Respondent; Stanley Weinstein (Yale University)

2部も同じテーマでカルパハナ氏の進行で行なわれ、次のような人々が発表した。

David Kalupahana (University of Hawaii, Manoa) Presiding

Theme; The Buddhist Vinaya in China and Japan (part II)

James C. Dobbins (Oberlin College)

Buddhist Precepts in the Jōdoshū

William M. Bodiford (University of California, Los Angeles)

Bodhidharma's Precepts in Japan

Paul Groner (University of Virginia)

The Re-establishment of an Order of Nuns in the Risshū Nunneries of Medieval Japan

Respondent; Stanley Weinstein (Yale University)

- 13) 部会名は Buddhism Section and Japanese Religions Group で、発表者と発表内容は次のようであった。

Sallie King (James Madison University) presiding

Theme; “Critical Buddhism” (Hihan Bukkyō); Issues and Responses to a New Methodological Movement

Steven Heine (Pennsylvania State University)

Critical Buddhism and the Debate concerning the 75-Fascicle and the 12-Fascicle Shōbōgenzō Texts

Dan Lusthaus (Bates College)

Critical Buddhism: Returning to the Sources

Nobuyoshi Yamabe (Yale University)

The Critique of “Dhātu-vāda” in Critical Buddhism

Jamie Hubbard (Smith College)

A Critical Appraisal: Critical Buddhism

Respondent: Paul Swanson (Nanzan Institute for Religion and Culture, Nagoya, Japan)

Shirō Matsumoto (Komazawa University, Tokyo, Japan)

- 14) 部会名は、Buddhism Section and Chinese Religions Group で、発表者と発表内容は次のようであった。

Stanley Weinstein (Yale University) Presiding

Theme; Living Words; Scriptural Transformation and Meaning in Tiantai

Paul Swanson (Nanzan Institute for Religion and Culture, Nagoya, Japan)

Say What?! Chih-i's Use (and Abuse) of Scripture

Linda Penkower (University of Pittsburgh)

Making and Remaking Tradition: chan-jan and the T'ang T'ien-t'ai Agenda

Daniel Getz (Bradley University)

The Tientai Vision: Reclamation and Reorientation in Siming Zhili (960~1028)

Daniel B. Stevenson (University of Kansas)

Ritual Text, Tradition, and Performance in Sung T'ien-t'ai

Respondent: David W. Cappell (University of Hawaii)

- 15) 部会名は、Japanese Religions Group で、発表者と発表内容は次の通りであった。

Ruben L. Habito (Southern Methodist University) Presiding

Theme; Innate Enlightenment (Hongaku) in Japanese History: A Re-exami-

nation

Paul Groner (University of Virginia)

Taking Teachings on Innate Enlightenment Seriously: Reading the Kankō ruijū

Fumihiko Sueki (University of Tokyo)

Two Contradictory Aspects in the Teachings of Innate Enlightenment in Medieval Japan

Jacqueline I. Stone (Princeton University)

Philosophical Climaxes and Moral Quagmires; Reconsidering Assumptions in the Study of Tendai Hongaku Thought

Respondents: Kenji Matsuo (Yamagata University)

Masatoshi Nagatomi (Harvard University)

なお、この学会の天台関係の研究発表については、ロバート・R・ローズ氏の「北米の天台学—1993年度AAR学会に参加して」(仏教学セミナー58号・1993年10月大谷大学)と題する詳細な批評があり、そのことを帰国早々に御親切にも奥野光賢氏からそのコピーを頂戴して知った。今はローズ氏の論稿に譲る。参照されたい。

16) この部会のテーマ並びに発表者・発表内容のプログラムは次のようなものであった。

New Wine in Old Bottles ?: “Traditional” Japanese Buddhism in the Modern Context

chaired by George J. Tanabe, Jr.(University of Hawaii, Manoa)

“Zen is the Work of Devils,” Etc; Nichirenist Exclusivism and Its Modern Critics

Jacqueline I Stone (Princeton University)

Satori for the Masses: Sanbokyodan and the Zen of New Religions

Robert Sharf (McMaster University)

Old Pilgrimages, New Roads ?: Contemporary Pilgrimages, Revived Traditions, and New Departures

Ian Reader (University of Stirling)

Reflections on Studies of Japanese New Religions and Buddhism

H Byron Earhart, (Western Michigan University)

Discussant; Neil McMullin (University of Toronto)

17) この部会のテーマ、発表者等は次のようであった。

Pureland Buddhism and Medieval Religion in Japan

chaired by Masatoshi Nagatomi (Harvard University)

Honen and Pure Land Folk Piety: Assimilation and Transformation

Allan A Andrews(University of Vermont)

The Specificity of Honen

Soho K Machida (Princeton University)

Buddhist Modernism, Shinran's Teachings, and Medieval Shin Buddhism

James C. Dobbins (Oberlin College)

The Timelines of the Jishu

James H. Foard (Arizona State University)

Discussant: Jacqueline I Stone (Princeton University)

18) この部会名は、Society for the Study of Japanese Religions で、午後6時30分～8時30分まで開かれた。

19) Mimi Yiengpruksawan (Yale University); ‘Chūsonji: Art and Mandate at a Medieval Japanese Temple’

Donald F. McCallum (University of California, Los Angeles); “The Power of Replicated Icons in Japanese Buddhist Temples:

The Seiryōji Shaka and Zenkōji Amida Triad Traditions”

以下、発表は順次、次のようである。

panel I

Robert H. Sharf: “Visualization and Mandala in Shingon Buddhism”

Respondents: Ian Astley, phyllis Granoff

Elizabeth ten Grotenhuis (Boston University); “Imperial Rule Over Nine Districts: Possible Sources for Japanese Taima and Two-World Mandalas in Pre-Buddhist China”

Respondents: Ian Astley, Bernard Faure

Ian Astley (University of Marburg, Germany): “The Reception of the Esoteric Buddhist Line of Transmission in Japan”

Respondents: Elizabeth ten Grotenhuis

panel II

James C. Dobbins; “Religious Portraits in the Shin School of Buddhism”

Respondents: Elizabeth ten Grotenhuis, Elizabeth Horton Sharf

Nishigori Ryōsuke (Kitakyūshū University): Obaku Zen Portrait Paintings and the Artists Who Painted Them”

Respondents: Elizabeth Horton Sharf, T. Griffith Foulk

panel III

Bernard Faure; “Zen Icons”

Respondents: Mimi Yiengpruksawan, Jan Fontein.

T. Griffith Foulk; "Icons in Medieval Zen Monasteries"

Respondents: Jan Fontein, TBA

Panel IV

Neil McMullin: "Oxen and Horse Imagery in Early Japanese Rituals"

Respondents: Mimi Yiengpruksawan, Martin Collcutt

Donohashi Akio (Kōbe University): "The Adornment of Monastic Halls: Themes and Stories in the Decorative Programs of Interior Wall Paintings"

Respondents: Koichi Shinohara, Karen L. Brock

Martin Collcutt (Princeton University): "Icons in the Mind of Yoritomo: Iconography, Religious life, and Political Power in the Early Kamakura Bakufu 1185–1221"

Respondents: Koichi Shinohara, Donald McCallum

Panel V

Karen L. Brock (Washington University): Kasuga Daimyōjin and the Valorization of Myōe"

Respondents: Bernard Faure, Neil McMullin

Paul Groner; "The Role of Images in Eison's Religious Activities"

Respondents: Karen L. Brock, James C Dobbins

Panel VI

Donald F. McCallum; "The Seiryōji Shaka as Portrait of the Historical Buddha"

Mimi Yiengpruksawan: "Gods in Pieces; The Ontotheological Ramifications of the Joined-wood technique in Japanese Buddhist Statuary"

Respondents: Paul Groner, T. Griffith Foulk.

- 20) この報告原稿を書いた後、8月下旬に渡米した折に再度、博物館を訪ね石板に刻まれた文字を再確認してきた。刊記は「紹聖乙亥清明日天水趙宏謹記 岐陽魏敏刊」とあり、紹聖乙亥の歳は確かに1095年に当る。また売店で求めた Freer Gallery of Art の出版誌 "Orientations" (May 1993) は、101頁にこの石板を写真入りで解説文を付けて紹介していた。ここではすでに大幅に紙数が超過しているので、後日、別の機会にその詳細を報告したい。